

氏名	大森 圭美		
学位の種類	博士（看護科学）		
学位記番号	博甲第 8724 号		
学位授与年月	平成 30年 3月 23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	日本人統合失調症者におけるセルフスティグマの認識		
主査	筑波大学教授	博士（医学）	日高 紀久江
副査	筑波大学准教授	博士（保健学）	大宮 朋子
副査	筑波大学准教授	博士（学術）	水野 智美
副査	筑波大学助教	博士（看護学）	杉本 敬子

## 論文の内容の要旨

大森圭美氏の博士学位論文は、日本人統合失調症がセルフスティグマをどのように認識しているか明らかにすることを目的とした研究である。その要旨は以下のとおりである。

### （目的）

著者は、統合失調症を含む精神障害者は社会的に好ましくない特徴をもつ人々と考えられ、差別や偏見の対象にされてきた歴史があると述べている。本研究では差別や偏見に類似した概念である「スティグマ」を用いて、スティグマの対象となる個人が自己の特徴または自己が属する集団の特徴を好ましくないとみなし、自己または集団の価値が低く、差別的に扱われることを容認し、それにより自己価値や自尊感情の低下を引き起こす状態を「セルフスティグマ」と定義している。また精神障害者に対する理解や認識は国により異なることから、本研究では日本人の統合失調症者がセルフスティグマをどのように認識しているか明らかにすることを目的としている。

### （対象と方法）

統合失調症者が自身の病識が欠如していることや自己の客観視が困難であることから、統合失調症者の内的視点についてはインタビューだけでなく行動様式を観察することにより、著者は本研究で統合失調症者のセルフスティグマの世界観を明らかにするためにエスノグラフィーという手法を用いている。

著者は、精神障害者のデイケアとデイケアを併設する精神科病院の各1施設を研究フィールドに選択して、65歳以下の統合失調症者に対するインタビューと観察を行っている。対象者にはインタビューガイドを用いて半構成的な面接を約2回行っている。また食事場面や体操等のプログラムを実施した際の統合失調症者の行動や言動などはフィールドノートに記載しているが、観察事項の記録に関しては限定した時間や場所で行い、著者は参加者としての観察者に徹することで対象者との信頼関係の構築を図っている。データの分析は Roper と Shapia、小田らの方法論に準じて分析を行い、エスノグラフィーの経験のある研究者にスーパーバイズを受け、精神科看護に精通した研究者とともに内容の妥当性、解釈の厳密性、分析の信頼性と妥当性を確保している。

### (結果)

著者が調査を行った2施設で対象となった統合失調症者は18名であったが、同意が得られた男性10名、女性3名の合計13名を分析対象者としている。

インタビューデータ及び観察された行動を分析した結果、著者は【「普通」ではないことを恐れ、「普通」であろうとする】、【自己を現実的に理解し、障害を認識する】、【努力すれば一人前の人として自立できるかもしれない】の3つのテーマを導き出している。

テーマⅠ【「普通」ではないことを恐れ、「普通」であろうとする】では、統合失調症者自身が統合失調症という疾患を理解し、統合失調症の特徴を踏まえ、統合失調症であることに対する思いを語っている反面、他者から「普通」から逸脱しているというステレオタイプにみられることを恐れながら、経済的に自立し、異性と親密な関係を築くなど、「普通」に生きたいと思っている様子が語られたと述べている。

テーマⅡ【自己を現実的に理解し、障害を認識する】では、統合失調症であるという自己の特性を理解し、社会や他者との繋がりの中で自己の限界を知り、自己に必要な社会福祉の制度や援助を認識している様子が語られ、統合失調症者が自己の障害を現実的に認識していると述べている。

また、テーマⅢ【努力すれば一人前の人として自立できるかもしれない】では、統合失調症者自身が「障害者」なのか「健常者」なのか、自分でも受けとめきれない様子が語られ、また現実的には「健常者」のように就労して経済的に自立するには厳しいと認識している一方で、努力すればできるのではないかと思っている様子が語られたと述べている。

このように対象者は、統合失調症者のステレオタイプを認識しているが、そのステレオタイプが自分に当てはめられることを恐れ、「普通」になりたいと行動を変容させようとしている様子が明らかになったと著者は述べている。またその「普通」に生きたいという思いのなかに、自分たちは「普通ではない」、統合失調症者として区別されているということを知っている様子が明らかになったと述べている。

### (考察)

著者は、統合失調症者が他者から「統合失調症者である」とみられていると認識していることにより「普通」でいようと意識していると述べ、また自分自身が統合失調症という病的な部分を違和感として感じているために「普通ではない」ことも意識しており、統合失調症である自己のなかには「なりたくない自分」としての「統合失調症のステレオタイプ」を捉えていると論じている。さらに統合失調症である自分は社会福祉の必要性を理解し、障害者として生きる気楽さを感じる一方で、「健常者」のように努力しきれない自分を認識し、それは統合失調症という病気であるためにそうなったと感じていると統合失調症者は捉えている。

著者は、統合失調症者が経済的に自立できない自分に対する劣等感を抱いているのは、「一人前」になることが「普通」であるという日本人の価値観が反映されているのではないかと論じている。また著者は、統合失調症者のセルフスティグマには、他者からみられている自分を認識し、また他者と自分との相互関係のなかで得られた自分についての認識もあり、これらは統合失調症者の自己概念に影響を与えている可能性があることを示唆している。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本研究で著者は、日本人の統合失調症者のセルフスティグマを、統合失調症者のインタビューと行動様式の観察により導き出している。統合失調症者のセルフスティグマには、他者からみられている自己と他者との関わりのなかで得られる自己に関する認識があることを明らかにした点において、精神科看護領域における患者理解に関する重要な知見を示している。

平成30年1月30日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(看護科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。